

## 寅彦を巡る旅 越後人・土佐へ行く

佐藤 妙子

寺田寅彦を知ったのは、二十歳のころ。

『吾輩は猫である』の登場人物・水島寒月君のモデルとして紹介されていた。『猫』の中で寒月君が一番好きな私は、当然寅彦に興味を持ち、彼の随筆を読んだ。さまざまな題材が書かれた随筆はどれも面白かったが、中でも心に残ったのは、土佐（高知）を舞台にした随筆群だった。幼い頃の情景を描いた作品は、子ども時代に感じていた幸福感を思い出させてくれた。

いつしか私は、高知に行きたい、と思うようになった。寅彦がいた場所に立ち、寅彦が見た景色を眺め、寅彦と同じ気持ちを味わってみたかった。

けれど、新潟から高知への道のりは、あまりにも遠かった。根が出不精であることも重なり、なかなか実行に移せぬまま、次第に高知行きも寅彦のことも、忘れがちになっていた。

転機は突然訪れた。偶然立ち寄った書店で、私は漱石が出て来る漫画を見つけた。何気なく手に取り、裏表紙に寅彦が描かれているのを発見した瞬間、私の中の寅彦愛が復活し、高知熱が急上昇した。「これは、高知に行けということに違いない」そう思い込んだ私は、その年の九月、ついに高知行きを決行。寅彦を知ってから十年以上経過していた。

生まれて初めての高知は、九月も終りに近いというのに暑く、そして眩しかった。新潟とは全然違う眩しさ。冗談ではなく本当に。そして、坂本龍馬一色であった。龍馬は嫌いではないけれど、寅彦のことしか頭にはなかった私は、なんとなく疎外感を感じてしまった。

気を取り直し、私は寅彦ゆかりの地を巡る旅を開始した。

最初に訪れたのは、もちろん寺田寅彦記念館。正面にある有名な銘文を写真に撮ってから見学開始。

記念館は、思っていたより広かった。静かな、風も通って気持ちいい。何より目を引いたのは庭だった。大きな石燈籠があちこちにおかれた緑豊かな庭は、落ち着いた雰囲気で見ている心が休まるそんな庭の中で、一番印象的だったのは榎の木だ。あの大きくて立派な姿と鮮やかな緑葉は、今でも鮮明に覚えている。



寺田寅彦記念館の庭の風景

記念館を後にして、次に向かったのは、寺田家の墓所。木々に囲まれた静けさの中、「寺田寅彦之墓」と刻まれた墓石を前にした時、私は「ああ、寅彦って本当にいたんだ」と実感し、涙が出そうになった。おかしいことだと思う。今まで寅彦の存在を疑っていたわけではないのに。でも、その時はなぜかそう感じたのだ。

感動的な墓所探訪であったが、実はその前にちょっとした事件があった。この際だから話してしまうが、最初はお墓を、というか目印の桜の木を見つけられず歩き続け、山を越え、山の反対側に出てしまったのだ。今となっては笑い話だが、それにしても、なぜ途中でおかしいと気づかなかったのだろう。どう考えても、あんな山奥に墓所があるはずなのに。まあ、寅彦に話したら、あれこれ面白く分析してくれそうな事例だとは思っただけけれど。

お墓参りを終え、向かった先は高知県立文学館。ここでは、寅彦ゆかりの貴重な品々を見ることができた。なかでも、漱石からの絵手紙、『猫』にも出てきたバイオリンを見たときは感激だった。帰り際、寅彦関連の図録や絵はがきを大量に購入。ものすごく重かったけど、満足だった。

これで終わりと思いきや、その日の夕方、私は再び記念館を訪ねた。お墓への道を教えてくださったことにお礼を言いたかったし、それにせっかく高知に来たのだから、もう一度、中を見ておきたかったからだ。

閉館間近にも関わらず、記念館の方は温かった。

そして、今年も、高知行きを計画している。行きたいところはたくさんある。種崎の貴船神社、朝倉の木の丸様、『嵐』の舞台である須崎。それと「孕のジャン」がいるという浦戸湾にも、できれば船で行ってみたい。そうそう、重兵衛さんのように「松魚の刺身のつまに生のにんにくをかりかり」もやってみたい。きっと、新たな発見と出会いがあるに違いない。そしてそれが、次の旅につながっていく。こんな風にして、寅彦を巡る高知の旅はまだまだ、いや、ずっと続くのである。



寺田寅彦墓所



高知県立文学館